

「第 37 回住まいのリフォームコンクール総評」

「住まいのリフォームコンクール」も今年で 37 回目を迎えた。コンクールの形や進め方には、時代の要請に応じていろいろな変化があったが、様々な条件に対応したアイデアに基づく興味深い提案が毎回のように入賞し、とても「ためになる」コンクールであることは確かである。審査についても、時代の要請に対応した内容を熟考した審査が続けられ、ますます充実していると言っても過言ではない。

しかし今回は、新型コロナウイルス問題のために世の中の様子がすっかり変わってしまい、例年通りの開催が危ぶまれる事態となった。どのような形でコンクールを開催すべきか、そもそも開催自体が可能か、などと大いに迷うところであったが、何とか実行に漕ぎ付けることができた。しかし諸般の事情の結果として、優秀作品の現地審査が実施不可能という事態になってしまった。

このコンクールでは、図面や写真だけでなく、実物を見ることが上位作品については必須として来ており、実物を見ずして作品の評価をするのは、このコンクールでは初めてである。これは審査にとっては大きな痛手であり、審査方法もこれまでとはかなり変わらざるを得ない。例年なみの作品数が集まるかどうかと言った不安だけでなく、このコンクールに相応しい作品の水準が満たされるか、審査がスムーズに実行可能なのか、などが危惧された。

しかし実際に審査作業に入ってみると、前年度に比べて応募作品数は確かに減ったものの、昨年の 430 件に比べて 405 件と、さほど致命的な縮小に至らなかったのは幸運であった。これは、建築と言うものは、規模にもよるが、設計から工事終了までに日時を要するものであり、リフォーム作品に関わる実際の作業についても、コロナウイルス問題以前から準備を重ねていたケースも少なくなかったとも解釈できよう。このような条件でも例年とさほど大きな違いの無い規模でコンクールが実施できたことは、幸運であったとともに、応募者の方々や審査に関わった方々の並々ならぬ尽力があつての結果である。

コンクールの応募作品の内容は、昨年と同様に「住宅リフォーム部門」と「コンバージョン部門」の 2 部門に分けている。審査の結果は、住宅リフォーム部門では 386 作品中 22 作品が入賞、またコンバージョン部門では、19 作品中 3 作品が入賞した。

作品の内容については、他に行なわれる詳細な発表に委ねるとしてここでは詳細は省くが、大勢の傾向にはさほど大きな変化は見られないものの、回数を重ねるにつれて応募作品の水準は良い方向へ進みつつある、という印象である。

次年度についてはコロナウイルス問題が終息しているかが気になるところだが、このコンクールが今後とも途絶えず、住宅リフォームの価値をますます認識させ、豊かな住生活の礎になることを祈るのみである。

第 37 回住まいのリフォームコンクール審査委員会

委員長 真鍋恒博